

共通意識からみる自然・環境  
～『信濃の国』の歌詞にみる景観～

県民歌 信濃国 長野県  
共同体 歌

序論 研究目的

長野県民歌『信濃の国』は、多くの県民が歌うことができることで有名であり、地域に定着している希有な歌である。ここで二つのエピソードを参照したい。

1(1947年) 県が制作し、県民歌に指定した『長野県民歌』を地域に定着させることができず、当時は明治期郷土唱歌のひとつであった『信濃の国』に県民歌の座を譲ることとなった<sup>1</sup>

2(1948年) 長野県を南北に分割するような分県意見書が提出され可決されそうになったが、分割に反対する議場傍聴席から『信濃の国』の大合唱が沸き起こり、分割はなしとなった<sup>2</sup>

これら2つの事例を鑑みると、『信濃の国』は明治から現在まで高い認知度を有していることがわかる。それにはどのような要因があるのか。本論の目的は、『信濃の国』がなぜ高い認知度を有するのかを明らかにすることである。

序論 研究方法

■『信濃の国』の位置づけ(第1・2章)

『信濃の国』と全国の県民歌を比較し、『信濃の国』が県民歌全体の中でどのような立場にあるのかを分析する。また、既往研究をもとに『信濃の国』が作曲され、県民歌に制定される迄の流れを整理する。

■歌詞・歌の分析(第3・4・5章)

『信濃の国』の歌詞に出る表現を自然、産業、文化の3つの側面から分析する。また既往研究より、歌の性質を整理する。さらに明治期以降に作られた信濃国のガイドブックなどの一次資料を対象とし、歌詞より得る『信濃の国』に描かれる信濃観と資料に描かれる信濃観を比較する。



図1 論文ダイアグラム 筆者作成

第1章 県民歌という制度

本章では日本全国の県民歌について、その制定の経緯、およびそれぞれの基礎情報を整理し、その上で、長野県民歌『信濃の国』が制定の上でどのような特徴を持つかを明らかにした。とくに、県民歌は方針・使い道がそれぞれ異なるが、1/3が郷土についての歌であり、『信濃の国』もこれに含まれる。<sup>3</sup>

第2章 長野県民歌『信濃の国』

本章では、『信濃の国』がどのようにして誕生し、県民歌に制定されるに至ったのかを、その時代の教育と、作詞者・浅井洌、作曲家・北村季晴に触れながら明らかにした。

明治時代に入り現代の基盤となる教育制度の設計が為された。小学校の教育課程で「唱歌」が教科となり、のちに郷土教育のため

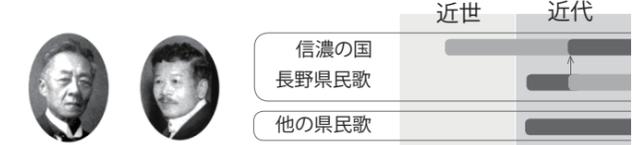


図2 作詞者 浅井洌 図3 作曲家 北村季晴 図4 県民歌の推移

Nature and environment observed by synesthesia - Landscape of "Shinano no kuni"; official song of Nagano Pref.-

<千年村>研究ゼミ  
1X10A025 宇田川理奈

の「郷土唱歌」を制作された。信濃国の郷土唱歌は6つ制作され、その内の1曲が『信濃の国』であった。殆どの県民歌は制定を目的として曲が制作されたが、『信濃の国』は既存の曲が県民歌となった唯一のものである。<sup>4</sup>

第3章 『信濃の国』の歌詞分析

『信濃の国』の歌詞は1番から6番までの6つの章で構成されており、信濃国が詳細に記述されている。これに単語や表現・文化の解説を加え、自然・地理、産業、文化の3つの視点から歌詞の分析を行った。

■自然・地理(共通)

歌詞全体の主要なテーマとなっているのが自然・地理的要素である。浅間山や諏訪湖など主要な山、河川、平野が網羅的に述べられているが、これらの自然が「国の鎮めなり」「国の固めなり」などと形容され、信濃国の基盤となっていることが強調されている(A)。

■産業(3番)

信濃国の産業は、3番で林業、養蚕業の2つがあげられている。これらは当時の日本で有数の精度と売り上げを誇った産業であるが、これは信濃国の自然立地がその産業形態に適したことによる。

■文化(4番)

信濃国には園原や目覚めの床など古くからつたわる名勝地が存在し、これらの場所についての詩歌が多く残されていることが示されている。

■偉人(5番)

「旭將軍義仲」「仁科五郎盛信」など具体的な人名を列挙し、自然や生産のみではなく文武の才を持つ人を排出していることを、その偉大さを自然に例えることで雄大に述べている。(傍線)

■愛郷心(6番)

信濃国の近代化について誉め称えた上で、信濃国の秀でた自然は偉人の輩出に貢献するものだと述べる。(傍線)

特徴的なのは、産業・文化・偉人・愛郷心の側面においても、自然との関係が歌詞に述べられていることであった。以上より、信濃国においては、豊かで雄大な自然のを基盤として産業や文化が成り立った、自然と文化が密に関わる体系があったと読み取ることができる。

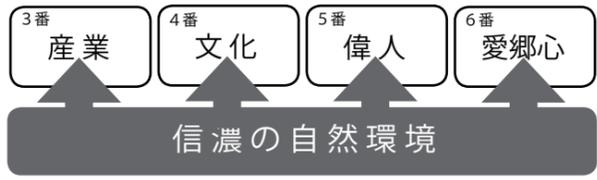


図5 歌詞にみられる信濃国の自然環境と産業・文化・偉人・愛郷心の関係

第4章 『信濃の国』歌詞と他資料との比較検討

第3章で分析した『信濃の国』の歌詞に描かれた信濃像が当時の人々にとって一般的であったかを検証するため、大正期以降の観光ガイドブック<sup>5</sup>などを参照した。

その結果、自然に関しては、歌詞に掲載される固有名詞はほぼ掲載されており、産業など他分野においても『信濃の国』の歌

UDAGAWA Rina

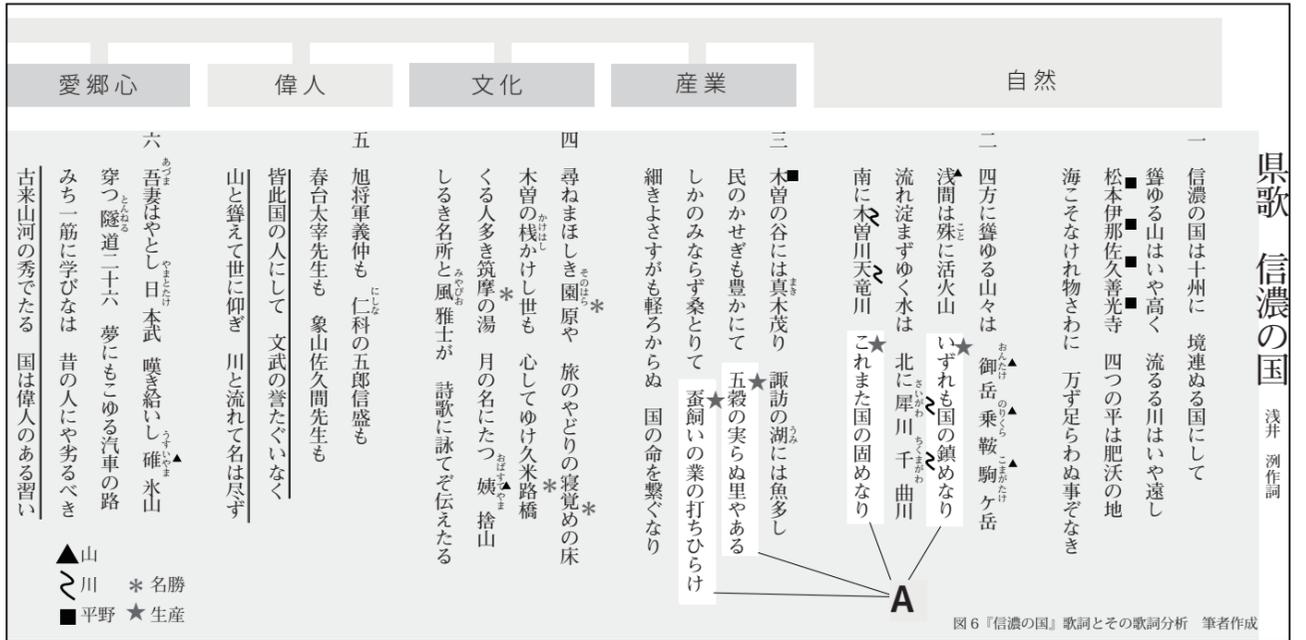


図6 『信濃の国』歌詞とその歌詞分析 筆者作成

詞と大きな相違は見られなかった。

以上より、人々の信濃に対する意識は、『信濃の国』の歌詞より読み取れる信濃像と重なる可能性が指摘できる。

第5章 歌としての『信濃の国』

明治の開国に伴い、雅楽や猿楽など様々な当時の邦楽に西洋音楽の要素が取込まれ、人々は西洋音楽をたしなむようになった。<sup>6</sup>そのような大きな変化のタイミングで生まれた『信濃の国』は、曲が2度つけられている。最初につけられた曲は北村季晴ではなく、彼の前任であった教諭が作曲したものであった。これは雅楽調の曲であり、当時の音楽的流行だとしていた西洋の調とは異なるもので、いわば「古い」曲調のものとならわられたと推測される。二つ目の作曲となる伴奏、つまり現在歌い継がれている『信濃の国』は、当時の唱歌としてつくられたため、当時としては最新の歌の形式に沿った曲調であった。以上より、当時の『信濃の国』には、歌詞のみではなく、そのメロディも含めて、歌として流行する要素を所持していたと考えられる。

第6章 考察 『信濃の国』の役割の変容

『信濃の国』が普及した理由として「歌」としての役割を考察する。第3章で述べたように、『信濃の国』の歌詞に描かれる信濃像の基盤は彼らの郷土である信濃国の自然環境にあった。それが当時の流行り調の曲に乗り、「歌」という形になったことが重要であると考える。

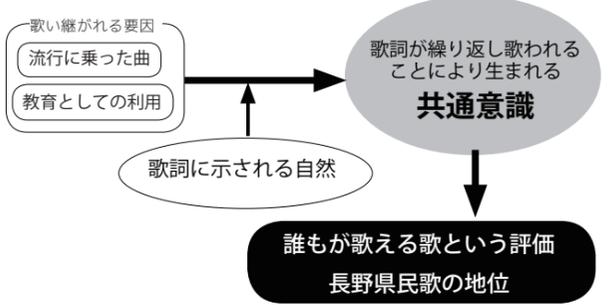
『信濃の国』は、郷土教育のための素材として広く歌われてきた。そのなかで、その歌詞が彼らの共通意識を形成し、結果的に、「教育のための歌」として始まった『信濃の国』は「信濃国民のための歌」に育て上げられていったのではないだろうか。



図7 『信濃の国』の歌としての役割

結論

『信濃の国』が現代まで歌い継がれ定着しつづけている理由として、歌の制定の経緯の整理し、歌詞と歌の分析を行った。その結果、『信濃の国』の歌詞に描かれた信濃像は、その背後にある豊かな自然を基盤にしていることがわかった。また、歌についても、二度の作曲を経て、歌詞のみではなくメロディーも含めて歌として流行する要素を有していた。これらが教育のための歌として繰り返し歌われることで、歌詞の信濃像が人々の郷土に対する共通意識を形成し、定着していったのではないだろうか。



註

1 \*長野県民歌 信濃の国・長野県\* 最終アクセス2013.11.14 http://www.pref.nagano.lg.jp/koho/kensei/gaiyo/shoukai/kenka.html 2 YOMIURI ONLINE http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/nagano/feature/nagano1197597072740\_02/news/20080131-OYT8T00730.htm、中村勝美『信州南北戦争 100年の戦い』樫(1991/04) 3中山裕一郎『全国 都道府県の歌・市の歌』(東京堂出版・2012.11.1 初版)、他各都道府県自治体ウェブサイトを参考とし、筆者がまとめた。 4中山裕一郎『全国 都道府県の歌・市の歌』(東京堂出版・2012.11.1 初版) 5 当論文においては『観光信濃』『信濃案内』『長野県案内』『長野付近名勝案内』を中心とし、大正時代以降に作られた地域紹介の冊子を利用した。6 釣谷真弓『おもしろ日本音楽史』東京堂出版; 四六版(2004/8/19)、田中健次『図説日本音楽史』東京堂出版(2008/7/1)

図版出典

図1、4-8 筆者作成/図2、図3 \*平林堂書店 信濃の国"http://heirindo.com/shinanonokuni/shinano\_sakusha.htm 最終アクセス2013.11.13

早稲田大学創造理工学部 学部4年

Undergraduate student of Creative Science and Engineering, Waseda Univ.